「あ♡、あぁあ…ッ！♡」

だだっ広い空間にうわずった嬌声が響く。

壁も天井も床も、すべてが純白の研究室。四方の壁のうち一面だけがガラスばりで、その向こう側はコックピットのような機材のひしめく暗い部屋だ。

「あっ♡あぁ…っ♡♡あぁあ……ッ♡、」

少年は小さな尻の間（あわい）に打ち込まれる、丸太のように図太い質量に声をあげつづけた。

乳首まわりと尻・股間まわりだけが露出し、あとは全身ぴっちりと肌に添った水着のような衣服を着せられた、十歳くらいの少年。

長めの黒髪の上部には、ふわふわとした黒毛に覆われた、猫のような耳が生えている。耳は少年が躰（からだ）を震わせるたび、ぴくぴくと敏感に動く。そうして大きな瞳をトロンと涙ぐませ、あられもない声を漏らし、か細い四肢を震わせている少年――。

それが目の前の、鏡のようによく磨かれたガラスに反射して映っている。向こう側のコックピットのような部屋が暗いので、それはもうよく見える。

「あ〝ッッ♡♡あぁあッッ♡い…ぃや……ぁ！、♡」

ズチュッ♡ヌチュッ♡ヌチュッッ♡……

白い部屋には、烈(はげ)しい水音も響いている。少年はスモモのように小ぶりな尻たぶを、背後の大柄な男に鷲掴みにされ、その中心の孔へひっきりなしに熱いものを抜き挿しされている。

男の股間から突き出た、恐ろしいまでに血管の浮き出たそれを。

「あぁっ♡♡あ…ッ♡あぁあ…ッ！♡、」

突き入れられるたび、自然と脚の付け根が開いていく。

ぬるぬる、ぐちゅぐちゅと潤った孔のなかを男に行き来され、声を噛めないほど悩ましい痺れが体内を疾(はし)る。

無力な少年はただ目の前のガラスに手をつき、小さな自分の躰を支えていることしかできない。

少年は金属製の台の上に立たされていて、それは大柄で高身長な背後の男と、腰の位置を合わせるためだった。

もう、こうされて何時間になるのだろう。

ガラスに映る猫耳の少年は、幼い顔を赤らめ、細い眉根を寄せて泣き喘ぎ続けている。

グチュッ♡ヌチュッ♡ヌチュッッ♡♡

「あっ♡あぁ♡…ひあッ♡♡、ぁ♡、」

止(や)むことのない抽送に身をよじり、ガラス壁に上体をもたせかける。むき出しになった乳首がガラスの冷たさに触れ、ぞくりと肺の奥まで痺れた。

あとはもう、縋(すが)るようにガラスに手を這わせていることしかできない。そんな少年を、前や後ろから、幾多(いくた)の視線が貫いている。

目の前のガラスごしのコックピットのような部屋から、十人ほど。

そしてこちらの白い部屋では、男に犯され続ける自分を間近で見ようと、五人の男たちにぐるりと取り囲まれている。

あっちの部屋にいるのもこっちの部屋にいるのも、皆(みな)、大人の男だった。全員が白衣を身に着けている。

「あッ♡♡あぁあ…ッ♡だ……め…ッもうだめ……ッッ！、♡♡」

何度訴えても、燃えるように熱い肉棒は速度を増すばかり。

これで四人もの男に続けて犯されていることになる。白い部屋の六人の男たちは順繰(じゅんぐ)りに、銀の台に立たされた少年を犯しているのだった。

少年の息と手の温度に、ガラスは曇りつづける。

けれどすぐに水滴が引くのは、向こう側の

部屋からの観察の妨げにならぬよう、曇り止めの加工がしてあるからなのかもしれない。

向こうの暗い部屋では、白衣の男たちが少年の様子に逐一注意を払いつつ、大仰な機械類に何かを打ち込んだり、画面に表示された数値や波形(はけい)を読み取ったりしている。

あれは一体、何をしているのだろう。

なんのために、こんな自分の姿を観察などしているのだろう。

それがさっぱりわからない。

気がつくとこのまばゆいほどの白い部屋にいて、白衣の男たちに引っ立てられ、台に立たされて。

なんの説明もなしに犯されはじめた。

男たちの服装や部屋の感じから、ここが何かの研究施設だとはわかるが。

このわけのわからない状況も、この施設の研究の一環なのだろうか。

わからない。

「心拍数 115。感度良好。発汗も基準値内です。どうぞ続けてください」

事務的な、淡々とした人声。

ズチュッ♡ズチュッ♡という水音にまぎれ、その声は背後の小型スピーカーごしに聞えた。声と同時にガラスの向こうにいる男の口も動いていた。今のは、あの男の声なのだろう。

小型スピーカーは、今は少年の背後の男の胸ポケットに入っている。

ガラスは思いのほか分厚く、防音の効果も

ある。
あっちの部屋とこっちとで会話するには、こういう機器が必要らしい。

「了解」

背後の男は少年を犯しながら、襟元のマイクへ短く返した。

彼らの一連の会話を聞いたところで、それらに一体なんの意味があるのか少年にはわからない。

ただ一つだけ明確なのは、これらが何かの研究だったとして、その研究対象は他

ならぬ少年自身なのだということだ。
先程スピーカーごしに伝えられた情報は、おそらく少年の身体状況だろう。

「あぁ…ッ♡♡あ♡、あぁあッ♡、あ…ッ！♡」

背後の男が、いっそう強く腰を挑ませてきた。

ひっきりなしに喘がされながら、少年はいよいよぴったり、ガラスに裸の胸を擦りつけた。躰を支えていたか細い腕からは、すっかり力が抜けてしまった。
腕だけでない。
腰、膝なども、本当はもうすっかり脱力して

いる。立っていられるのは、背後の男から細い腰骨を強引に掴まれているからにすぎなかった。

そうして太く力のある親指で、柔らかな尻タブを内側から目いっぱい開かされ、あらわになった孔へ絶えず強制的な結合を強いられる。

ズチュッ♡♡ヌチュッッ！♡ヌチッ！♡♡

「あ″ッッ♡♡あ″ッッ♡あああっ！♡」

男にがっちり固定された細腰を突かれるたび、孔内から抗(あらが)いようもない快感が打ち

あがる。強靭な男の手に抑えられていなければ、少年の軽い腰は大袈裟に跳ねあがっていたことだろう。

「あ″ぁあッ♡♡♡いや…！いやあ…ッッ！、ッ♡♡」

ガラスにしなだれ、けれど下肢だけは男との結合のために後方へ固定された体勢で、泣きながら訴える。

孔を擦られ、突かれる快感はもういらない。

強すぎる刺激を絶えず送り込まれ、少年の背は何度もしなり、後頭部でばちばちと

火花が散る。

「ひッ！！♡♡、」

強く突かれた拍子に躰が押され、硬くなった乳首をガラス壁が圧(お)し潰す。

熱持ち、こころなしかぷっくりと膨らんだ薄桃色のそこから甘い痺れが駆けおりた。

臓腑の奥が燃える。

「あ″ぁ！♡♡ひ♡、あ″ッ！♡あぁあ…ッッ♡！…♡♡」

そんな少年の状況を知ってか知らずか、男はますます強く腰を打ち込んでくる。これ以上はないと思っていた速さがまた一段引き上げられ、ものも言えぬほどとめどなく奥を穿(うが)たれる。

「あ″ぁッ！♡あ″ッ！♡♡あ″ッ！♡あ″ッ！！♡♡♡」

ズチュッ！♡ズチュッ！♡グチュッッ！！♡♡

あまりに強制的な抜き挿しに、世界がたわむ。

歪曲した自分の手の輪郭をどこか遠くに見ながら、全身の力がいっそう抜け、自重が結合部にのしかかるのを恐怖のうちに感じとる。

視界が、頭の中が、白に染まる。

「あ〝　あ〝　あぁあ　あ　あ　あ　つ　ッッッ！！！！！！！！！ッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

極めつけとばかりに最奥(さいおう)深く突き込まれ、脳天まで白く弾(はじ)けた。

腹底から湧き上がる衝動のままに、張りつ

めていた股間から精を散らす。多量に噴き出された白蜜はガラス壁を濡らし、これまでの射精ですでに白くなっている少年の足元をさらに染めた。

熱い頬をガラスに押し付けたまま、少年は目を白黒させて痙攣した。

「15 分 52 秒です」

また背後のスピーカーから、声。

同時に、

「あああ…っ…、！♡」

しばし動きを止めていた男の剛直が、ゆっくりと動き出した。

それはまだ筋肉の塊のように硬く、少しも衰えていない。

「い……いや…あ……っ…♡、だめ……、」

か細く震える少年の声など、誰も聞こえていないかのようだ。

絶頂の余韻にひくんひくんと大きく波打つ少年の孔内を、変わらぬ硬さの男が行き来しだす。

「あぁ…ついや……ついやあ…！っ……もう動かないでえ……！！」

涙を流して叫ぶも、願いが聞き入れられることはない。

「あ…ッ、あぁあ……ッ♡あ……ッ、」

再開された往来が、徐々に速さを取り戻していく。

チュプ…♡、グチュ…♡グチュ…ッ♡

だんだんと間(あいだ)の短くなるその音が怖くてならないのに。泣くほど拒んでいる図太い

それが肉の間(あわい)を行き来するたび、頭がジンと熱くとろけていく。

「あぁッ…！♡♡あ″…ッッ♡！あ″ッッ♡♡♡、」

あっという間に男は剛健(ごうけん)に突きはじめ、少年は軽い躰を何度もしならせた。

少年の孔の入口は乳首と同じようにぷっくり充血し、淡く色づいている。菊状の皺が刻まれた、練りきり菓子のようなその孔を、テラテラと赤黒く濡れ光る肉杭に何度も何度もこじ開けられる。

結合部からは前の男たちの注いだ精や、少年の体液がないまぜになって漏れ伝う。男が少年のなかをジュプジュプ烈(はげ)しく掻き混ぜるので、それらの液体は時折、泡立ちながら少年の腿(もも)を伝いさえした。

びしょびしょに濡れそぼった太腿を小刻みに震わせながら、少年は孔を穿(うが)たれ続けるしかない。

「あぁああ……ッッッ！！！♡♡♡♡♡♡」

そうして拳のように膨らんだ男の陰茎が弾(はじ)けたとき、少年もまた、なかで彼を締め付

けながら精を放っていた。すでに男のもので目いっぱいの場所を、さらにどっぷりとした粘液で満たされていく。その感覚にすら、おぞ気(け)ではなく快楽を拾い上げる躰。犯され続けたせいで、絶対に感覚がどうにかなっている。

「あ……♡、…あぁッッ♡♡」

極(きわ)みに達したのちもびくびくと跳ねる少年の腰から、ずるりと勢いよく男は抜け去った。

「0分57秒です」

事務的な声が、スピーカーから響く。

腰が男の手から解放されると、少年はがくんと膝を折り、ガラスにずるずるともたれながらへたりこんでしまった。そのか細い腕を、また別の男の手が掴みあげる。

「い…いや……ぁ…！」

大きく叫んだはずなのに、かすれた喉から漏れるのは蚊の鳴くような声だ。

「あと二人です。どうぞ続けてください」

そう声の鳴る小型スピーカーと小型マイク